

■ 今後しばらく、市場の関心が最も強まるのは日銀の動き

昨日（26日）のNY市場では、NYダウ平均が13営業日連続で上昇し、米国債利回りは低下した。つまり、今回（7月）の米連邦公開市場委員会（FOMC）の結果とパウエル米連邦準備理事会（FRB）議長の発言内容は「そういうもの」であった。

目下のところ、9月の米利上げは見送られると見る向きが多い模様だが、次回FOMCの開催までには2カ月分の新たな「データ」を確認することになるため、当然、決め打ちで臨むことは憚られる。6月の米消費者物価指数（CPI）の結果については「ベース効果」の発現も指摘されており、7月以降のデータについては想定より強めに出る可能性もある。

こうした状況下であればあるほど、相場はテクニカルに動く。

前回更新分の本欄でも述べた通り、ドル/円は7月14日にテクニカルに下げ止まって反



発した。同日（14日）の安値は200日移動平均線（200日線）と89日移動平均線（89日線）によって下値をガッチリ支えられた（左図参照）わけだが、同水準は3月安値から6月高値までの上げに対する半値（50%）押し水準でもあった。

さらに、一目均衡表の日足「雲」が下値を支える格好となっていることも確

認されたうえ、週足で見ると目下は62週移動平均線（62週線）もドル/円の下値サポートとして立派に機能していた。

そこからの入り返しにおいても、ドル/円はテクニカルに上げ渋って反落した。上図で再度確認できるように、14日安値からのリバウンドは21日移動平均線（21日線）が位置するところで上値をガッチリと押さえられたわけだが、同水準は6月30日高値からの下げの61.8%戻しの水準でもあった。

執筆時の日足ロウソクは、一目均衡表の「雲」の中に潜り込む格好となっており、この「雲」上限が当面の上値抵抗として強く意識されるようであれば、あらためて200日線を試しに行く可能性が高くなる。ただし、本日行われる欧州中央銀行（ECB）理事会の結果やラガルド総裁の発言が想定よりハト派寄りであった場合、一旦はドル買いが強まってドル/円が日足「雲」の上方に浮上する可能性もあると見られる。つまり、この「中銀ウィーク」をすべて通過するまでは、何とも言えない状況が続く。

あらためて考えてみると、米利上げは「今回で打ち止め」か「せいぜい、あと1回」であると思われ、その一方で日銀は遅くとも次回以降の会合で政策の一部見直しに踏み切る可能性が高いわけで、少し長い目でドル/円は下値リスクが高いと見ていいだろう。ただ、下値トライの動きが鮮明になるまでには今暫しの時間が費やされると見られ、その間、スワップポイントの支払いが積み上がる売り方の立場は正直辛い。よって、今後幾つかの「データ」が確認されるようになるまで、ドル/円は意外なほど底堅く推移し続ける可能性もある。

とまれ、これからは日銀の政策方針に対する関心がこれまで以上に高まる。市場の観測の変化をつぶさに捉えて行くことが何より重要となろう。（07月27日 09:45）